

■ 第4回日本土木系学生会全国大会に際して

第4回日本土木系学生会全国大会準備委員会

真夏の太陽、キラキラと輝く海辺の波—いよいよ夏期休暇のシーズンがやってきました。昨年度、第3回全国土木系学生会大会が、関西地区で開かれ、土木系学生会も日本土木系学生会と名称を新たに、今後の発展を期待すべく、輝やかな出発を致しました。土木系学生会当時、過去3回の全国大会が、関東、九州、関西地区の順に行なわれ、昨年から今年にかけて、中国・四国地区、中部地区がそれぞれ新発足しましたが、再度、関東地区のもとで、第4回日本土木系学生会全国大会が開かれます*。このことは、われわれ、関東地区の者にとって大なるファイトをわかすもとなり、喜びにたえません。本大会も、真近かにせまり、準備にも一段と気迫が入り、毎日、多忙な日々を送っています。私どもも、過去、第2回、第3回大会に参加もしておりますし、その経験談もまじえながら、関東地区の本大会の準備状況をお知らせ至したいと思ひます。

まず、本大会の準備状況をお知らせする前に、過去3回行なわれている当全国大会の意義を書いてみたいと思ひます。私は、第1回大会については、先輩からのお話だけで、参加しておりませんので詳細までは知りませんが、第1回大会は、関東地区主催で行なわれ、その当時、準備に当たられた先輩たちは、皆、優秀な方たちばかりで、土木系学生会の基盤をつくられたと聞いております。さらに、九州地区の私と同期生の話などを聞きますと、この第1回大会に参加された、九州地区の先輩村田さんは、当時の関東地区の活動に感激し、帰郷されてから、土木科学生全員参加制の九州地区土木系学生会の基礎をつくられたとのこと。さぞ、先輩は、当時の関東地区の活動に感激し、自分たちもということで、この喜びを土木科学生皆に分けて上げたいとの決意から九州地区の誕生があったのだと想像致します。

これは、全国大会に参加された一学生、否一先輩のエピソードであります。このように、全国各地からの土木工学専攻の学生が、同一場所に集まり、宿泊をともにし、さまざまな日程の中で、個人的交流、さらには他地区、他校の学生との共通の話題に花を咲かせ、3泊4日の短期間ではありますが、お互いの親睦、交流を計るうえ

に、また将来、同じ職場で、過去に知り合った者同志が、偶然出合うといったすばらしいできごとが実現しないとも限りません。われわれのおもむくであろう職業の性格から、ことに「人の和」が重んぜられると申すか、お互いの協調性が叫ばれる世界であるなら、なお一層学生時代のこうした親睦、交流は大切、かつ価値あるものではないでしょうか。なお、大会開催中には、他地区の活動状況もわかるし、自分たちの活動にも、考えなくてはならない点を見いだすだろうし、今後のお互いの活動上の問題点を知ることができるわけです。

第2回大会は、九州の阿蘇山のふもとにある「国立阿蘇青年の家」で行なわれました。ここはとても空気の澄んだ良い所でした。われわれ、東京に住んでいる者にとっては、何と美味しい空気なんだろうと、実感として味わった人も少なくないと思ひます。多分に、研修、練磨が目的の宿泊所でしたから、厳しいと思ひましたが、さまざまな団体と一緒に、朝の集い、昼食などをともにした楽しい3日間でした。筆者には、それが、楽しい思い出としてよみがえってくるのです。

第3回大会は、前述のとおり、関西地区の手で、大阪の立派な旅行会館で行なわれました。第2回大会以上の参加者があり、盛大ではありましたが、関西地区側のスタッフ不足が原因か、九州大会からみると迫力という点で、物足りなさを感じました。しかし、日本土木系学生会規約案が承認されるとともに、日本土木系学生会が設立されたことは、過去の全国大会史上に、華々しい1ページを残したと思ひます。こうして、今夏、再び関東地区主催で、日本土木系学生会設立後、第1回大会が開催される運びとなったわけです。われわれは責任を感じるとともに、これ以上の名誉はないと準備に精を出しております。本来ならば、第3回大会以前に発足した中国・四国地区に、本大会のバトンタッチがなされるはずでしたが、彼地区にとっては、発足したばかりで、自分たちの組織が、とても全国大会を開くまでに至っていないと、関東地区が重責を受けることになりました。関東地区は、過去第1回大会が行なわれてますが、現在では、当時の関係者は1人もおりませんし、結局、白紙から出発するわけで、ちょっぴり不安も感じますが、第

* 8月28～31日

1 回大会以上に盛大な大会にすべくファイトに燃えています。

さて、昨年度から進められている本大会の準備は、現在、着々と進行しております。今大会は、日本土木系学生会設立後、初めての全国大会ということで、ぜひともそれにふさわしいだけの内容にと、さまざまな角度から、今大会のメインテーマを検討した結果、単純でしかも難解な「社会における土木」という言葉に決めました。すなわち、社会における土木の役割りとといった点にポイントを置きこの機会に、土木工学科を専攻しているわれわれの見方を変える上にも、他分野のさまざまな先生方をお呼びして、社会という視野に立ち、土木を捕えて、考えてみようではないかということになりました。私たちは、講義の上では、確かに、土木工学というものを、それぞれの専門別に、教授などから話を承わり、土木屋が土木を捕えることはある程度やってきています。しかし、私たちの知らない別な分野の人々が一体、土木というものをどのように捕え、考えておられるかを知るのには、将来においても、大いに役立つことではないでしょうか。したがって、先生方には、社会工学、都市計画といった、さまざまな土木工学を集約した上での考えを必要とする教授、さらには、作家、評論家（さまざまな分野の）、政治家などをお招きしたいと考えています。しかしながら、現在、それぞれ、先生方と交渉に当たっていますが、先生方の都合で、私たちのテーマにふさわしい先生が呼べない事態が起こらないとも限りません。この点、私たちは精一杯の努力を至しておりますが、私たちの意図としている点は良くご理解頂きたいと思えます。

宿泊に関しては、東京都心に至しますと、学生にとっては、一寸大変な費用になりかねますので、郊外にしました。われわれは、本当は、スモッグの東京というものを肌感じて頂きたいとも考えましたが、やはり遠来者の皆様方のことを考え、多少、第 2 回大会の会場と似ている「八王子大学セミナーハウス」という、学生の研修が主なる目的の場所に決めました。当宿泊所における多

少の規律に関しては、私たち大学生である以上、我慢して貰いたいと思います。本大会は、確かに親睦、交流をはかることが最大の目的ではありますが、ある程度の厳しさも、加えて必要なことだと考えます。

なお、われわれ、主催者側が困ったことが一つあります。見学会は、例年の大会開催中、行なわれてきましたが、現在、関東地区にとって、東京都心ならびに郊外をみますと、見学にふさわしい工事現場が少ないということです。ゆえに、この際、見学会を止めて他の企画を考えようではないかといった極論も出る状態です。われわれ関東地区の者が、どうしても見学会を行ないたいと考えるならば、茨城県の鹿島港建設、長野県の奈川渡ダム工事現場といった、他県にまで出かけて行かなくてはならない始末です。しかし、開催期間、また、他地区からの参加者のことを考えるなら、とてもこれらは実現しそうもありません。したがって、見学会を、関東地区中心に考えるなら、いくらでも中止にしてもさしつかえありません。が、他地区のことを考えれば、完成・竣工している構造物、建築物でも、初めて見学される方ばかりですし、止めることはできないと思います。こんなわけで、結局、見学としての本来の工事現場の迫力は薄れますが、日程上、厳しさの中にもリラックスは必要と考え、バスハイク的な 4 コースを決め、見学会を行なうことにしました。さらに、各コース途中に現場があれば、汲み込んでいくという方式をとることにしました。例年、見学会は、ほとんどバスが利用されますし、バス乗車中での親睦、交流がはかられることが多いとも考えますので、見学という以上に、全国大会の意義を達成するうえに、最短距離ではないかと思えます。当大会が、どんなものか、またその良さは、いくら文章化した所で、本当の姿を理解できるものではありません。本来の意義は、参加されて初めてわかるものです。最後になりましたが、主催者側関東地区でも、現在、一生懸命準備しております。ぜひ、他地区の皆様方が 1 人でも多く参加されんことを希望して止みません。

(文責・中大 鈴木)

日本土木史 —大正元年～昭和 15 年—

- 体 裁：B 5 判 8 ポ横一段組み 本文 1770 ページ 図 410 葉 表 500 点
写真 150 枚余 上製箱入革製豪華製本 定価 12000 円 (〒 300 円)
- 内 容：第 1 章 河川・運河・砂防・治山／第 2 章 港湾・漁港・航路標識／第 3 章 農業土木／第 4 章 都市計画・地方計画／第 5 章 道路／第 6 章 軍事土木／第 7 章 上水道・下水道および工業用水道／第 8 章 土木行政／第 9 章 建設機械／第 10 章 トンネル／第 11 章 発電水力およびダム／第 12 章 鉄道／第 13 章 水理学／第 14 章 応用力学／第 15 章 土性および土質力学／第 16 章 測量／第 17 章 土木材料／第 18 章 コンクリート／第 19 章 土木教育史／第 20 章 学・協会史／付・日本土木史年表